

平成 26 年度第 10 回 仙台市震災復興メモリアル等検討委員会

- 日 時 平成 26 年 12 月 25 日 (木) 16:00～17:30
- 会 場 市役所本庁舎 2 階 第一委員会室
- 出席者 稲葉雅子委員、大草芳江委員、大滝精一委員、佐藤正実委員、高橋あゆみ委員、
高橋悦子委員、西大立目祥子委員、増田聡委員、間庭洋委員、宮原育子委員、村
上タカシ委員、本江正茂委員、渡邊浩文委員
- 議 事 1 開会
2 議事
(1) 仙台市震災復興メモリアル等検討委員会報告書の提出
3 閉会
- 配布資料 仙台市震災復興メモリアル等検討委員会報告書

○事務局 (横野室長)

本日は、昨年からこれまで 9 回の集大成といいますか、取りまとめの成果として報告書の提出という事で各委員の皆様にお集まりいただきました。本日、阿部委員から急きょ所用で欠席というお話をいただいております、それから大滝委員、高橋悦子委員から所用で遅れるという連絡をいただいております。

本日は、報告書を提出して頂くのですが、前回、11 月 18 日に第 9 回の委員会を開催いたしました。その議論などご意見をいただきまして、そのご意見を反映させた報告書案につきまして、事務局の方と各委員の皆様でやり取りを進めてきました。その上で委員長にお諮りしたうえで、現在手元に「仙台市震災復興メモリアル等検討委員会報告書～東日本大震災の記憶と経験を未来へ、世界へ、つなぐ提言～」ということで完成版として取りまとめた次第でございます。

まず、宮原委員長から報告書の提出をよろしく願いいたします。

【宮原委員長より仙台市長へ報告書を提出】

○事務局 (横野室長)

ありがとうございます。では、この後進行を委員長にお願いしたいと思っております。お願いします。

○宮原委員長

ありがとうございました。皆さん改めてこんにちは。本当にお陰様で、先程市長の方に皆さんでご議論いただきました報告書を無事提出することができました。本当にありがとうございました。

今日は、この 2 年間を総括するような形で、委員の皆さんお一人お一人からこれまでの委員会や、それから報告書への感想、提出しました報告書を受けて仙台市への今後の期待等をお一人 3 分位でお話頂ければと思っております。今日は、あいうえお順ということで、ただ増田副委員長からスタートさせて頂き、あと委員の先生の方にお渡ししたいと思っておりますので、よろしく願いしたいと思います。

では、増田副委員長よろしく願いします。

○増田副委員長

一番最初のご指名ですので、少し感想をお話したいと思います。

僕自身は、他のまちでどういうメモリアルの議論が行われているのか、あまり定かに

は存じ上げていないのですが、一つは震災遺構をどう残すかという委員会が、これ以外にも沢山の所で動いているというのと、この間、国交省の方とお話した時に、国営のメモリアル施設が陸前高田市と石巻市につくられるという、そのような議論を聞いています。どちらかというところでの議論は物として何を残すのかとか、何をつくるかというところからスタートしていると感じていました。

今回の仙台市の震災メモリアルは、拠点という言葉が出ているし、幾つかのハードウェアもそれにくっ付いてはいるのですが、基本的にはどういう機能を持った施設や組織を、これからどうつくっていくかというところから議論をスタートさせたので、どういうものをつくるかという話に行く前に、根本のところを少し話すことが出来て良かったのではないかなと思います。震災から4年位経っていくわけですが、これからのメモリアルの大きな方向性と考えなければいけない項目は、この検討委員会の報告の中には盛り込んでいるのではないかなと思います。

ただ、二つ気になっていることがあります。一つは仙台を含めた少し広域のいろんなメモリアルが、いろんなところで議論されていく中で、それをどうやってネットワークを組み、この東北地域全体の震災メモリアルという考え方をどうまとめるのかというのは、実はそういう場所が無くて、多分復興庁あたりも議論しなければいけないとは思っていますが、そうなっていないのが、1点気になっているところです。

もう一つは、丁度僕が仙台に来た頃、仙台都市総合研究機構が立ち上がる時期で、さらに都市学会の東北支部の事務局を仙台市役所に置いて頂いたりして、地域からの政策提言というのが一時あった時期なんですけど、その後色々と紆余曲折があつて組織が無くなっていくわけですね。今回、メモリアルとして残すことの先に、何をつくるかという事に対して、地域からの提言なり情報発信なりをやっているような組織が、実はそろそろ必要なのではないかなという風にも感じていて、このメモリアルの拠点機能より先に、そういう政策シンクタンク的な役割であったり、復興への提言であったり、仙台だけではないと思うのですが、そういう様な事を組織にしていくのが、この先の展望として世界へつなぐ提言ということになっておりますので、つながっていければなという希望を持って感想にしたいと思います。

実際にどういうメモリアルが出来るかというのを見守っていきたいと思います。2年位の検討委員会でしたが大変お世話になりました。ありがとうございました。

○宮原委員長

ありがとうございました。続きまして稲葉雅子委員をお願いします。

○稲葉委員

みなさん、こんにちは。ここ2回ほど、欠席が続いてしましまして非常に申し訳ありませんでした。

私は、今、宮原先生と一緒に南三陸町の町民会議にもお邪魔をしまして、そちらと比べる訳ではないですが、やはり仙台という広いところでこういう議論していることもあるかなと思うのですが、もっともっと沢山の人を巻き込んで考えていけたら、今後いいのかなという2年間思い続けてきました。

感想と意見ということで2つほど述べさせて頂くのですが、一つはメモリアルも、その時代の人に合わせたメモリアルの伝え方があるのではないかなということです。今、私は仕事の関係で南三陸町や、気仙沼ですとか、そういったところに東京の方をご案内することが多いのですが、最近来る方はニュースも覚えているけれども、「へえー、そうだ

ったんだ」という方が意外に多いのですね。ニュースを見たけれども、あまり記憶がないという方とか、若い方ですともう3年経っているので、当時中学生でしたとか、高校生でしたとか、そういう方もいらっしゃいます。何かその時代のその人達に合わせた伝え方とか、伝えるメディアとかがあったらいいなと思っております。

もう一つ、先ほど増田先生のお話にもありましたが、やはり東北、仙台は、仙台で一つ大変なところはあり、沿岸部と住宅地と伝えなくてはいけないこともあると思うのですが、東北の中での仙台の位置づけというのを考えていかななくてはならないかなと思います。東北のあれだけ大変だったことを、まとめて情報が分る所というのがありませんし、仙台がそういったことの中心を担っていくべきではないかなと感じています。

それをどうしたらいいのかというのは、まだまだ私だけでは何とも出来ないのですが、今回2年間お世話になったことをベースにして私なりに何かやりたいなと思っております。

以上です。ありがとうございました。

○宮原委員長

ありがとうございました。それでは大草委員お願いします。

○大草委員

皆さまこんにちは。有限会社 FILED AND NETWORK 及び、NPO 法人 natural science の大草と申します。

私は、この仙台市震災復興メモリアル検討委員の前に、仙台市の総合計画の審議委員を務めさせて頂いた流れで、その後震災が起こってこの検討委員を務めさせて頂いたという経緯があります。

私自身、このメモリアルということを最初に聞いた時は、震災遺構を残すとか何か物を残すという事を目的としている事業なのかなというイメージを持って参加いたしました。しかしながら、この2年間、皆さまと議論する中で、私がそうではなかったのだと気付いたのは、この最終的な基本理念にも書いてあります通り、このメモリアルは「時を経て世代が代わっても、災害から命を守るために仙台市民一人ひとりが東日本大震災の記憶と経験を未来へ、世界へ、つなぐ」という風に書いてあります通り、こういった経験を過去のものとしてだけでなく、未来に、そしてまた空間的にも広がって世界へつなげていける様な、そういうものになるというのが、非常に大事なんだなということはこの2年間の議論の中で痛感いたしました。

その理由としても、やはり私自身は復興という直接的な携わりをしていなかったもので、私自身の見方というのは、ある意味一つの見方でしかなかったと思うのですが、今回の委員さんの様にいろんな立場の方、いろんな視点の方が一つメモリアルという事をテーマに議論する中で「こういう立場の方だったらこういう風にお感じになっていらっしゃるんだな」とか、「こういう事が大切だと思っているんだな」とか、そういう事を私自身が気付く良い経験になりました。よって、これからもメモリアルの取り組みというのが、恐らく後々東日本大震災というのは、そもそも何だったのか、こういう事の問いかけをきっと仙台市の方も、また仙台市外の方も、また未来の方も問いかける時がいつか必ず来るかと思うのですが、そういう時に知りたいと思ったり、理解したいと思った時の一つ拠点といいますか、大きな材料となったらいいなと非常に願っております。

また、そういったものを、より理解して活用していく中で、ここの報告書の中にも推進体制として多様な人と協働して、この事業を推進していきましょうということもございしますが、やはりいろんな考えの方が議論をしながら、常に過去のものとして残すのではなく、その時

その時の人が見方、捉え方、自分のものへ吸収していくということを、色んな相互作用の中でやっていくという事が非常に大事なかなということも、この委員会の2年間の議論で私が非常に感じた所です。

ですから、今回のメモリアル検討委員の結果が、今後も多様な人達との議論の中、協働の中で是非より必要だと思う人達の手元に届くような、そういう体制を仙台市さんの方にとって頂けたらいいなと思っております。

私からは以上です。

○宮原委員長

ありがとうございました。それでは佐藤委員お願いいただけますでしょうか。

○佐藤委員

20世紀アーカイブ仙台の佐藤です。2年間大変お世話になりました。ありがとうございました。

私なんかは、言いつばなしにして、それを事務局の方に上手くまとめて頂いたようなそんな提言になったのではないかなと思います。大変ありがとうございました。

今回まとめられた提言書の中で申し上げますと、特に関心が強いのがアーカイブの整備と利活用という点です。今回、「感情や想いを含めたアーカイブ」という、非常に高度な利活用の仕方があげられています。これは、他都市では今までなかった非常に先駆的な発想です。単に、写真や映像やテキストなどの素材を集めることがアーカイブではなく、その想いを気づくことであったり、紡ぐことであります。また、何万点という写真点数を集めることがアーカイブの役割ではなく、その活動を続けることがアーカイブであるという、そういったまとめ方になっているということは他に例の無い、画期的な提言ではないかなと思っております。

特に、街中拠点と沿岸部拠点という2つの拠点を持つことは重要だと思います。街中に住んでいると、4年前に震災があったのかいうほど復興をしている状況で、それを気にせずに生活をしていることはすごく幸せであると思うのですが、ただ、一方で震災について語る機会がめっきり減っていることは、震災の風化を考えると大きな問題だと思うのですね。それを街の中に拠点をもち、そこで展示や資料収集、話し合いをもち、ヒアリングを行うということを、ここにきちんと明示されていること自体、沿岸部と街中とのやり取り、または大多数の方が住んでいる街の中で震災を忘れないのだという、強い意志表示ができたのではないかなと思っております。

一つだけ気になるのは、11ページに街中拠点と沿岸部拠点の図示されたものがありますが、街中拠点にメディアテークや戦災復興記念館、歴史民俗資料館などが入っていますが、今年度末には震災から4年目を迎え、1年後には節目の5年目を迎えるという事になってくる訳で、ぼんやりとしたままではなくて、出来ればこの検討委員会の後にでも準備委員会等がすぐに立ち上げ、街中の拠点として何処にするのかということ、例えば、何となく消去法でいくとメディアテークではないのかなという気がするのですが、そこに拠点施設をもってすぐに活動を進められるようなことが必要になってくるのではないかと思います。

もう一つだけお話をさせて頂くと、仙台市の震災メモリアル協働事業の中で、一般の大学生や社会人と一緒に「3.11 オモイデツアー」というのを今年やらせて頂いているのですが、そこに県外の方等が参加していくと、どうしても蒲生や荒浜というのは津波によって更地化されて雑草が生えてしまっていて、元のまちがどうだったのか分からないとい

うことです。のっぺらぼうなまちだと仰る。やはり、まちに元々どんな生業があったのかということ伝えるということが必要な訳で、そういった意味では、震災だけのアーカイブだけではやはり片手落ちで、西大立目さんもよく仰いますが、震災前の暮らしぶりというのをきちんと伝えていく必要があるだろうと。その辺を感じていました。

長くなりましたが以上です。

○宮原委員長

ありがとうございました。続きまして高橋あゆみ委員さんお願いします。

○高橋（あ）委員

福島大学の高橋です。

今年度は2回欠席という事で申し訳ありませんでした。そして、前職はワカツクということで今年度は福島に拠点をおきながらも委員会に出席させて頂いてありがとうございました。

今、佐藤委員が仰った所で、丁度、私も2点感じるころがありました。

1点目は、やはり何をするにもプロセスがすごく大事だなという風を感じております。この提言の中で、様々な事業がありますが、緑の再生という事で木と一緒に植えたりとか、あとはアーカイブを市民の人と一緒に編集をするということがありますが、そのプロセスを通じて人と人との出会いがそこで生まれて、その人との会話から元々どういう暮らしをしてきたのかというのを知れる機会なのかなという風に思っています。やはり1回だけ会うのではなくて、何回も会う事でその人の考え方というのを知ることができるという事があると思うので、そういったプロセスの中で多様な人と触れ合える機会、そういう多くの人を集める周知の仕方ということにも工夫が必要だと思えますし、そういう機会をいかに作っていけるかというのがすごく大事だなと思えます。

2点目は、学生と普段話をする機会が多いので、そこから聞く話ですと、仙台にも有るかなと思う話ですが、学生達が目に見える問題というのは震災があって起きた問題なのだと思う人が多くて、実はそうではなくて、元々その土地にある人のしがらみだったりとか、そういったものが歴史、成り立ちがあって、それが震災によって顕在化してしまったんだよというのは、やはり人の話を聞かないと。「あ、そうだったんだ」と初めて理解する学生達が多くて。前からあったものを伝えていくという事がすごく大事かなと思えます。

仙台市への今後の期待という事でもあるのですが、やはり、一つのモデルというか、希望になってもらいたいなというようには思っていて、ここの委員会中で、この理念の部分だけではなくて、どう展開していけるのかということまで、ここまで明確に出せる仙台市は、福島に限らず、これから災害が起こった土地にも有効に活用されるモデルとなるのではないかなと思えます。

ありがとうございました。

○宮原委員長

ありがとうございました。それでは高橋悦子委員さんお願いします。

○高橋（悦）委員

色々ありがとうございました。

震災当時から色んなところをまわらせて頂いて、学校とか、地域もそうですが、子ども達の状況を中心にいろんな方々からお力を頂きながら歩いてまいりました。

メモリアル委員会に参加して、これからを考えてみると、やはりいろんな方々の声を

聞かなければいけないなという様な事を一番先に思いました。その声を聞いただけではなくて、どのようにつなげて、未来へ向かっていくのかということ、知らされたような気がします。

やはり、傷ついた中で、いろんな方々が、いろんな力を持ってここまで生きてきました。その想いが多分被災を受けたのですが、軽く済んだ私達にとっては到底計り知れない所にあると思うのですが、私達が今までやってきたことというのは、寄り添うことしか出来ない。でも、寄り添うという事が、こういう事なのだということ、大きく知らされた。文字だけではなくて知らされたという状況が今あります。私も何度か行っていますが、やはり被災地はとても寂しい状況になっていますが、人が戻れないという場所もありますし、戻れるようになった場所もあります。地域の人達は、やはり「この場所でもう一回住もう」「生きていこう」というように決めた方々を前にしながら、女性からも男性からも声を聞きながら、どう生きていきたいか、そんな地域になったらいいのだろうねということ、昔を振り返りながら明日をみるという状況の集まりを何回かしているのですが、やはり傷ついたことだけではなくて、先を見るという事が何故こんなに皆さんの中に出てきているのか。地縁、血縁で東北人は強いなとよく言われたのですが、それとともにいろんなご支援を頂きながら、東北の被災地の人達が受容力、人を受け入れる力がものすごく大きく育ったのではないかなと思います。今まで、東北の人達は自分たちでものをつくって来て、困った人がいたら「どうぞ」という力がとてもあったのですが、実は人から受けるというのに慣れていなかったのですね。それを今回震災でそういう形も必要なのだということ、どんな時にどんな力が必要なのかという様な事も学んだような気がします。

このメモリアル委員会でも精一杯いろんな声を皆さんから出して頂いて、私も学ばせて頂いたのですが、いろんな皆さんの声を一つずつ拾い上げ、形としてどうつないでいくのかということが、このメモリアル委員会の大きな今後の役割になる。市民としての役割になるなというように捉えています。本当に文字で書いただけではなくて、本当にこれが被災地に生かされるようなものになるように、市民としても一人の人間としても、今後も関わらせて頂きたいなと思っております。ありがとうございました。

○宮原委員長

ありがとうございました。続きまして西大立目祥子委員お願いします。

○西大立目委員

2年間どうもありがとうございました。事務局の職員の方は、本当に取りまとめが大変だったと思うのですが、お疲れ様でした。

どういう形で、何をやって頂きたいかということはまとまったと思うのですが、やはりこれから具体的に何人ぐらいのスタッフの人が、そういう場所で、誰と関係を築きながら、具体的に何を実現するかというのはこれからなんですね。そこを継続性のある体制を取って頂きたいなと思います。それで、私が繰り返し申し上げて一番気になるのは、形に残っていない、残らなかったもの。結局更地になってしまっ、そこの土地の記憶と人々の記憶がどうなっていくのかというのが一番気がかりで、津波の被害の大きさを物語っていくにしても、それまでがどうだったかという事を改めて記憶を記録するという作業が絶対に必要だと思うのです。本当に記憶こそ地域の、そして人々のアイデンティティの根幹を成すものだと思うので、そこが抜け落ちた時に、やはりメモリアル事業もそこが抜けちゃうのではないかという気がしています。

この間、記憶の街プロジェクトというのがあって、白い模型をつくって、被災した人達がそこに来て記憶の旗を立てていくという、色々ところでやられていて、青年文化センターでやったり、若林区の仮設住宅集会所でやったりされていました。あのようなものを仙台の被災地全域でやれないものかなと思いました。それによって被災した人達が、自分を取り戻す作業をあれて出来ていくのではないかなというような、直感なんです、そんなふうに思いました。

2 拠点もいいですし、これから語り部さんが出てきたり、ツアーの人をあそこに連れていくというのはすごくメモリアルの事業でこれから増えてくると思うのですが、あのような被災地があくまで対象化されるというか、対象の場所として、対象する人々として見てしまって、そうすると被災した人がどうやって主体を獲得していくかという、事業の中に一番大変な思いをした人が自分を取り戻す何かの活動とか、運動の何かきっかけを得られるような、そういうものが何か必要という気がしています。

三本塚というところで「オモイデゴハン」というのをやっているのですが、仙台市さんも一生懸命やってくださっているのですが、あのような作業をしていくと、やはりいつも受け身でいろんな人からやってもらっていた地元の人達が、おもてなしをする番になる。そうすると非常に張り切ってやってくださって、地域の歴史を見直したり、関係性を見直したり、これからこういう事をやってみんなに来てもらおうよという話になったり、何か手間はかかるのですが、あのようなことをやっていかないと、やはり被災した人達がいつまでも下を向いたままですよね。

長いスパンのなかで、外に向けても大事ですが、内側に向けて何をやっていくかという事を十分に考えて、進めて頂ければなと思っています。よろしくお願いします。

○宮原委員長

ありがとうございました。それでは間庭洋委員お願いします。

○間庭委員

まず、たくさんご意見があったと思うのですが、委員長、副委員長という立場で、皆さんの意見をよく引き出して頂いたことに感謝します。また、奥山市長も 20 時間を超える長い時間お付き合いを頂いて、山のようなご意見があったであろうに、みなさんの意見をよく聞いて頂き、さらには事務局の方でこれを取りまとめ、ご尽力いただきました事に、最終回ですので改めて感謝いたしております。

また、委員のみなさまの大変鋭い突っ込みやら、ちょっと理解に苦しむようなご意見が一部あったり、しかし、すごく深いご意見もあったり、私も会議所としましても大変委員会の中での意見、あるいは今回のまとめなどについて、やっている最中に、我々の商工会議所の事業に随分生かさせて頂いたもの、つまみ食いで申し訳ないですが、沢山ご馳走になりましたことを重ねて御礼申し上げます。

せっかくここまで取りまとめられましたので、時々東北の会議所の人達とこういう情報交換をするのですが、基本的には東北が復興や、あるいはもっと頑張れるように、力を合わせられるように、仙台は特に頑張れよというのが大体落ちなのですが、そういった意味でも今回のまとめを関わらせて頂いた私どもとしましても、これの実現のために仙台市さんがお取りまとめられたものであります、みんなでやらなければならないという思いでありますので、是非具体化、推進を一緒にしていきたいという意思表示をして感謝申し上げたいと思います。

ありがとうございます。

○宮原委員長

ありがとうございました。それでは村上タカシ委員をお願いします。

○村上委員

宮城教育大学の村上です。まず、この様な場で震災に関するいろんな意見交換が出来たことをみなさんに御礼申し上げます。ありがとうございました。

この中でも未来へと取り組む仕組みということで、いろいろな提案がなされているわけですが、その中で中心部と沿岸部ごとに拠点をつくるというのがあります。こういう大きな大震災というのは非常に長いスパンで考える必要があると思うのですね。例えば100年スパンとか、そういう風に考えた時に、今仙台市も色々と変わっていくかと思いますが、その街の中の拠点をどこにするのか。先程メディアテークというお話もありましたし、あるいは、今後、戦災復興記念館であったりとか、あるいは仙台市の本庁舎であるとか、こういう所を建て替える際にそういう機能を持たせるとか、いろんなことを考える必要があるのではないかと思います。その拠点ですが、プロジェクトをやる場合は、よくヒト（人）・モノ（物）・カネ（金）というふうに言われる訳ですが、拠点は一つのモノだと思ってしまうのですが、それを誰がどういうふうにか動かしていくのか。ヒトの部分というのが非常に大事になってくるんですね。動かす人というのは、例えばディレクター制度みたいなものであったりとか、その拠点が出来て、ただそこに役所の人がいればいいというだけではなくて、それは先駆的に仙台市の市民協働推進課などが取り組んでいるような市の職員と民間の市民、NPO、あるいは大学であったり、いろんな専門家の人と協働でやるような仕組みでの取り組みとか、そういうのを是非参考に組織づくりを進めていってほしいと思います。

また、カネというもので考えますと、予算ですね。これは復興庁なんかでも、例えば、時限で5年間とかあるかと思いますが、それで終わりという事では当然なく、未来へ続くようなきちんとした予算計上が必要だと思うのですね。そのためには、何回かこの会でも提案しました、公共事業の建築費の1%位をそういう基金にまわす様な仕組みであったりとか、そういう条例につながるようなアプローチであるとか、そういったことが必要になってくるのではないかと思います。

さらに具体的にどういう内容を今後そういう所がやっていけばいいのかということで、単に元通りに戻すという事ではなくて、よく言われている創造的復興という、「創造」の部分ですね。そこに入っているのが、アートとか芸術文化の要素じゃないかと思っています。

より特徴的な仙台の取り組みとして一つ参考になるものとしては、例えば、私の生まれ故郷の熊本でも、くまもとアートポリスとか、コミッショナー制でやっている取り組みとかあるんですね。非常に国際的な、著名な建築家が来てそういう公共物をつくっていく。伊東豊雄さんとかメディアテークを建てられる際、今ではメディアテークは非常に有名になっていますが、その前は熊本のアートポリスで未来の森ミュージアムという、以前子どもの時に村上が遊んでいた公園にあれが建ったんですね。そういう場所で非常に思い出深い建物であるのですが、そういう特徴的なことをやると世界中からわざわざ見に来る人がいるんですね。メディアテークもそうですね。こういう、これから沿岸部を再開発する際に、ただ単にお任せではなくて、それこそ仙台市と民間、または東北大学をはじめ大学関係者など、色んな人が入ってコンペ形式とかでそういう取り組みをすれば、かなり特徴的な創造的なインフラ整備が出来るのではないかと思います。

また、モニュメント事業というのが入っていますが、これも参考になる事例としては、新潟で行われているような越後妻有アートトリエンナーレであったりとか、こういうアートを組み込んだ取り組みというのは、非常に定着し、また国際的にも評価が高いんですね。そういうものを参考にしていくのもいいのではないかと思います。

いずれにしても、この委員会で提案されたものを具現化していくためには、やはりその継続した組織と、また、市長さんをはじめ市の方々、民間のNPOであったり、大学関係者であったりとか、産業界であったり、いろんな人達と協働出来るような仕組みでの組織づくりですね。それを是非こういう場でも整備していただいて、つなげて頂ければと思います。

以上です。ありがとうございました。

○宮原委員長

ありがとうございました。続きまして本江委員さんお願いします。

○本江委員

東北大学の本江でございます。皆さまには2年間お世話になりました。

大変興味深い議論の続く委員会として、毎回来るのが楽しみで「なるほど」と思いながらお話聞いていました。よく覚えておりますのが、割と初期の会に市長が「行政というのは事業を立ち上げるけれども、年度内でここまでですよと枠を決めて、その中で終わらせて、一丁上がりというふうにしたがる癖がある」と仰ってまして、「まあ、それはそうだよな」と思いつつも、「そうはいきませんよ」ということを、みんなで言う2年間だったなと思います。

村上委員も今仰ってましたとおりで、長く続きますよという話を繰り返ししてまいりました。時間としても400年位はやらないとねと言ったと思いますし、空間の面で「そこは仙台市ではないですから」と言っただめですという話を繰り返しして、東北で一番大きなまちなのだから被災地全体のゲートウェイとしてのリーダーシップを発揮する必要がありますよねという話も繰り返しして、それもちょうんと盛り込んでいただけたかなと思います。やはり、仙台市はさすがだと思うのは、モニュメントとかミュージアムとか即物的な事業計画に一足飛びにいつてしまわないで、非常に骨太で充実した強いコンセプトを示すことが出来たのではないかなと思っております。

特に、事業推進体制をきちんと確立することが必要だという事が明記されていて、市民一人一人がと言っただけでも、それでは焦点がぼけるので、そこで行政の中できちんとした組織をつくる事が重要だという事がきちんと含まれているのは大変意味のあることだなと思います。

今回の報告、提言のあと、これから拠点の整備はじめ、色々なものを具体化していくと思うのですが、リアルで意味のあるデザインをしていくフェーズになっていきますので、そのことはまだ触れられていないので、これからの具体化のプロセスが非常に重要な課題だなと思っています。

説教臭い言い方になりますが、震災復興とか、その表現にかかわることというのは、政治的に非常に正しいことなために、逆に、デザインをする時にもものすごくナイーブなものになりやすく、そこは非常に危険で、危うい可能性もあるんだと思います。

一冊、本を紹介をしようと思います。今年の夏に翻訳が出たのですが、ジェニファー・ワイゼンフェルドという、アメリカの美術史家書いた「関東大震災の想像力」という本があります。関東大震災の後、どんな写真が撮られ、どんな絵がかかれ、どんな映画が、ある

いはどんな広告が出されたのか。震災をどの様に表象して人々は受け入れていったのか、というのを非常に膨大な資料にそって書かれた視覚文化論です。この中に、我々がこの震災の経験をデザインしていく時に、教訓にしなければならないことが沢山書かれています。例えば、非常な劇的な出来事なので、スペクタクルに表現されて、すぐに消費をされてしまうのか。あるいは悲劇の経験として表現されるんだけど、往々にして関東大震災は直後に戦争の時代に入るので、その悲劇の経験が簡単に転換されて、政治的に利用されていく経緯であるとか、いろんなことがあります。メモリアルがつくられるけれども、時代を経ていくとどんどん意味が変わっていく、形骸化していくということも、容易に起こってしまうよという事もあります。一節紹介すると、小学生が関東大震災が起こった年号 1923 年というのを学校で暗記させられると。「地震ひと (1) 揺れ、国 (92) さん (3) ざん」と覚えるんだそうです。「子どもたちはその歴史的意味を理解することなく、防災訓練を通じて身体の中に、棒暗記を通じて頭の中に、震災を内面化する。かくして、この出来事が表面化させた深い社会的・文化的・歴史的意識から教訓を学ぶ機会を国民が得ることのないまま、妥協的に出来上がった本所の記念館の中に、簡略化され削除された教科書のなかに、お決まりのこととして繰り返される防災行事の文化のなかに、関東大震災の記憶は、物言わずとどまりつづけている。」という風に言っています。もう我々も少しずつ忘れ始めているし、繰り返し「盛りながら」話をしているうちに、何が本当だったか分からないということもあるし、そういう形骸化が簡単に起こってしまいます。そこはきちんとアーカイブをして、よいデザインをして残していくということが、改めて次の具体化のデザインの課題だなというふうに思っているところでございます。

○宮原委員長

ありがとうございました。それでは渡邊浩文委員さんお願いします。

○渡邊委員

渡邊浩文です。長期間にわたり様々な議論をありがとうございます。

私個人の印象というか感想を申し上げますと、私だけではないですが、何人もの委員の方々が仙台市の復興計画の方の議論から継続してこちらにも関わっていらっしゃるのので、僕は勿論連続したものとして捉えていて、震災復興計画の検討の会議は限られた時間の中で限られた政策メニューがあって、私にとっては大変辛く、苦しい会議でして、消化不良な感覚がものすごく強くあったのですが、こちらのメモリアルの検討委員会の方では、そもそもメモリアルとは何であるとか、何をメモリーして、そもそもメモリーを何のためにするのかというところから始まったように思います。これは委員の皆さんが仰っておられるように、1,000年とは言わないまでも、400年位は伝えられるようなことを考えなければいけないのではないかと、繰り返し出てきましたし、私も流れに棹差して、400年先まで伝えるためには、今考えられることを全部やらないといけないのではないかとという様な、大げさなことを申し上げましたが、そういった議論がこういう広範な視野の報告書という事にまとめられたのではないかと。特に、「記憶をつないでいく」ですとか、佐藤さんが仰った様に高度なところまで踏み込んで提言しているというのは評価できるのではないかなと思います。

ただ、一方で、これも皆さんが繰り返し仰っていることですが、あくまでもこの提言書というのは、これから400年なりやっていくためのスタートラインというか、現時点でのスタート方法でしかないのですので、事業という形で展開していくものも勿論あるでしょうが、これからのいろんな対応の中で新たに盛り込まなければいけないものがき

と出てくることではないかなという気もします。その辺を、是非柔軟に構えて頂ければなと思うところです。

あとは、この震災は、特に津波被害が特徴的で、地震災害ということだけでしたら、仙台は随分前からもう近々やってくるぞと言われ続け、かつ、我々経験的にも30年、40年に一度は大きな地震に見舞われていて、それなりの備えをとっていたのも確かなんですが。要するに何を申し上げたいかという、あのような津波被害というのは、考えてもいなかった訳も分からないことが起こりえるのだということを我々は知ってしまった訳で、そういう意味でも東北の各地と勿論仙台市も含めて、新しい世界に踏み込んでしまっている。そういった新しいことを今までの考え方ではなくて、新しい地平に立って、物事を進めていかななくてはならないということも、今回の震災の教訓の一つだと思います。随分色んな議論をしてきましたが、現時点での総括に過ぎない訳です。幅広く、長く取り組んでいかなければいけないし、取り組んで頂きたいと思います。

もう二つだけ。まず一つ目は、まだ早いと思うのですが、子ども達に対してどう伝えていくかという所があって、もう少し丁寧な議論と、仕組み、仕掛けづくりが必要なのかなと思います。なかなか、それこそ辛いお話ではあるのですが、それを我々大人がきちんと伝えていかなければいけない。どうやっていくかというのは、本江先生が「箱物をつくっておしまいという訳ではないよね」という事を仰られた通りで、工夫していかなければいけないと思います。

最後に、もう一つだけ、これは本江先生が本当は言わなければいけないところだと僕は思っていますが、前回、「英語版を是非つくれ」というお話を。僕もこれは大変重要なところだと思いますので、あえてダメ押しさせていただきます。

ということで以上です。

○宮原委員長

ありがとうございました。まだいらっしゃらない委員の方もおられますが、皆さんからお話をいただきました。

先程、佐藤委員がお話していらっしゃる時にちょっと触れればよかったのですが、12月20日に震災前後の写真集「オモイデピース」をおつくりになったということですので、是非ご紹介をして頂ければと思います。

○佐藤委員

委員の皆さんにはお配りをしているのですが、「オモイデピース」という84ページカラーの冊子をお配りしています。これは、震災前の仙台の沿岸部の写真、地域地元の方々が思い出したことを語って頂き、それを今の写真と同じ場所で撮ったものについて併記をしながらその写真に思い出した言葉としてコメントを載せているものです。記憶や風景や体験が、3.11前後をひとつに結びつける、つまり地域アーカイブと震災アーカイブを一本でつなぐ試みとして、全国の皆さんからクラウドファンディングで資金面でご支援を頂き作らせて頂きました。全部で500部つくり全国の図書館とご支援頂いた方々にお配りしているものです。今日は委員の方にも見て頂きたいと思ってお配りしました。蒲生や荒浜を訪れる際には、震災前はどうだったのかをこの本をご覧いただきたいと思います。先ほど申し上げた様なのっぺらぼうなまちではなく、こういったまちだったということを再認識できる様な資料になればと思います制作させて頂きました。以上です。

○宮原委員

どうもありがとうございました。貴重な資料を皆さんの方に出して頂きました。いろ

んな形でのメモリアルのあり方というのをご提示いただいていると思います。ありがとうございました。

それでは、私の方からも少しお話をさせて頂いてよろしいでしょうか。本当にみなさん、昨年からの震災復興メモリアル等検討委員会ではお世話になりました。私も最初にメモリアルと言われた時に、どういう形でまとまっていくのだろうというのが、なかなかイメージができず、スタートの頃は、例えば沿岸部を皆さんとフィールドワークをしたり、荒浜小学校を見たり、そういう中ではやはり物として残すものというのは、ものすごく大事なんだなという事も非常に実感をしたところです。一方で、仙台市は市民局さんを中心にして「伝える学校」という、当時の記憶等をどうやって伝えていこうかという事業も行われていて、今日こちらにいらっしゃる委員さんの方達もその「伝える学校」の中で様々なプロジェクト、プログラムをつくられて、市民の方達と一緒に、もうある種メモリアルといえますか、伝えていくという活動をされています。仙台市さんは、とにかく沿岸部の生活再建の方を急がれて、非常に精力的に取り組まれている一方で、昨年からのタイミングでこういう形のメモリアルを構築していく、仙台市の中でどういう風に考えていくかという議論をスタートさせました。非常に私としては、「伝える学校」の授業を含めて、物だけではなくて、やはりメモリアルといった中には、本当に市民の方やお住まいになっていらっしゃるお一人お一人の記憶、そういったところも含めてどう長く残していくかという事がものすごく重要だということを実感いたしました。

委員会の議論でも、この様な大変個性あふれる皆さんの顔ぶれであり、それから、本当に日頃地域の震災前からまちづくり、それから地域のことに色々関わっていらっしゃって、震災後も引き続き地域の人達からの声を沢山聞かれていらっしゃる皆さんでしたので、実際の議論に関して、ないしは方向性に関しては、今日市長にお渡しした報告書の通り、単に物という事ではなくて、やはり中身の部分、それから心の部分もどう長く残していくかというところがきちっとつくられてきたと思います。残す仕組み、それから残していく部分で今回このタイトルにあります、「未来へ」という部分ではあえて、何年後という話ではなくて、やはり仙台市が存続する限りこれがずっと残って欲しいし、それから世界へというところでは、この市内だけに留まらず世界中、空間的にもっともっと広い部分で、このメモリアルを広げていくということが、仙台市のメモリアルとして非常に重要な視点ではないかなと思いました。

今日、皆さんからも改めて色々ご意見をいただきまして、本当にこのお渡しした提言書、提案が、きちっと実現されていくことを私も願っています。

実は、ここの取りまとめをしてくださった震災復興室の皆さん、本当に精力的に何度も何度も足を運んで、文章の推敲、それから色々な資料の作成等をしてくださったのですが、震災復興室も期限の限りあるセクションとうかがっています。この後、この報告書を踏まえ、実行をきちんと仙台市の中の部署の中でも位置付けて頂きながら、そして、まちの中でもそういったメモリアルの拠点がしっかりと目に見える、皆さんが利用できる様な形で提示されていく、整備されていくということが、大変重要かなと思っています。

神戸ももう20年経とうとしているのですが、神戸では「人と防災未来センター」があるのですが、そこの方にかがいますと、震災後例えば10年経った後に、震災の時に色々なメモリアルのものがあつたが、その当時はやはり出せなかった。例えば、ご家族が亡

なくなった後に、貴重な記憶の行き場所がなくて、センターの方に預けたいんだけどという様な形で、時間を超えてそういった後から出てくるもの、ないしは後から想いをようやく言える人達のための受け皿として「人と防災未来センター」の方で担っているんだなと思います。

私も仙台市もそういう形で、本当に極端な話、一世代後に「実は」ということで出てくる大切な記憶、想いもあると思います。そういった受け皿となるような形で実現して頂きたいなと思っております。そういう中で協働という所を謳われていますが、協働の形も市民と市役所という図式ではなくて、多様な大学やNPO、それから本当にそういう事をしたい人達、そういう人達が一緒に集ってこの記憶をつないでいくという、そういうことが出来るような形での受け入れ、ないしはオープンに手を広げて頂くという姿勢が大切かなと思っております。

6つのプロジェクトを見返しても、これからどんどん進めていくと思います。今回委員さんの中で、大切にしたいと思われた部分として、全部そうなのですが、例えば、文化芸術の力のところですね。文化や音楽、スポーツも含めてですが、アート、先ほど村上委員さんが仰いましたけれども、そういったところの力を、記憶をつないでいく力として是非整備して頂きたいし、この日をどうやって過ごすか、3.11の過ごし方といったことも皆さんで議論をしました。一人一人がこの日を大切な日として伝える様な形で、何か位置づけられないかという議論もしています。

2年間、非常にじっくりと皆さんで、本当にスタートから議論を進めて頂いて、長かったようにも思うのですが、提案書の中で一応骨子という形では、皆さん果たせたと思うのですが、本当に具体的に何をしていくかというところでは、これからこの委員のみなさんも仙台市にいらっしゃいますから、色々と意見を言いながらこれを実現できる様な形でみんなで見守り、または参加して当事者としてもやっていきたいなと思ってます。是非、これからも引き続き渡邊委員さんが仰ったように、メモリアルのこれがスタートになることですので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

皆さまには、本当に2年間のご協力に感謝したいと思ひます。どうもありがとうございます。

それでは、本当に2年間、毎回の委員会にご同席をいただきまして感謝しています。最後に奥山市長からもご発言をお願ひしたいと思ひます。

○奥山市長

改めまして、委員の先生方には本当にお忙しいなかで、こうして10回に及ぶご議論の上、この場での議論だけではなくて、それぞれ仕事の場とかいろいろなところに事務局も押しかけていきまして、お時間を頂く中でこういう形でまとめて頂いたことに本当に心から感謝を申し上げたいと思ひます。

私の大きな願ひとしては、メモリアルという単語としては一つなんですけど、今もお話がありましたように、様々な被災の状況があり、かつての暮らしがありという中で、具体的には震災で残されたものだけに留まらない、仙台市としてこういうものをメモリアルとして考えるというものに対してなるべく多くの広い視点を得たいということと、それを、確かに現時点でしかないのですが、現時点で深められる限り、深めて頂きたいという願ひがありまして、このように長時間ご議論を頂くことになったわけでございます。

そういう事をして頂くと、きっと役所にとって都合の悪い話も一緒に出てくるんだろうなと、私も密かに思わないではなかったのですが、最初に委員の先生方が、これは後

世に100年、200年、300年、400年と残る様な議論なので、現代の市長や事務局が都合がいいとか、悪いとかそういう次元の話をしている訳ではないとしっかり釘を刺されましたので、「ああ、そういうことであるな」と思って、私も無駄な努力というか、抵抗するのは全く諦めて、まな板の上に乗ったような心境で今日を迎えた訳でございます。

今、沢山のお話を頂きました中で、これからボールは今いったん仙台市役所の行政体の方で受け止めさせて頂くことになります。ご提言頂いたものをどの様に人の組み立てをし、またそこで事業費をつけ、検討していくか、また、拠点施設の整備一つをとっても、我々だけで決められるものではない、地元の方々との話し合いや、また学識経験者の皆様との話し合いや、さまざまなデータも関係機関との共有といったことも、まだまだ詰めていかなければならないことが沢山あります。そういう訳ですので、我々自身としても、もう一度これを受け止めさせて頂いたボールを今度は行政のものとして、どう行政の中のシステムにマッチさせてやっていけるか。もしくは、マッチしないものについては、どういうこれから作り込みが必要かとか、お時間を頂く中で順次進めていきたいなと思っております。

いずれにしても、長い時間やっていくものだという事を、重ねて重ねてお話を頂いておりますので、そのことはしっかり受け止めさせて頂いて、けっしてこの事業には終わりはないんだという覚悟でスタートをするという、普通行政というのは、早く終われという事を目標に仕事をしまするので、終わらないという事を目標に仕事をすること、まず普通は無いのですが、この事業に関してはおそらくそういう事が委員会のご提言の最終的な骨格であろうという事を我々もしっかり受け止めさせて頂いて取り組んでいきたいなと思っております。

重ねて「英語で」というお話を頂き、事務局は非常に困惑をしておりました。「市長、そういうお話があるのですが、どの様に考えたものでしょうか、今まで色々な審議会からご提言を頂いたのですが英文化した審議会の提言というのは、仙台市ではないと思います。」という話でありましたけれども。私なりにその後ご意見、お考えを受け止めさせて頂くと、これは世界の方に知って頂くという事を旨とするメモリアル事業をこれから立ち上げていくからには、そのスタートラインがどこにあったかということの世界に発信せずして、どうやって世界に伝えていけるのか。その一つの気持ち、意欲、意志を明確にするのが英訳ということなのだ、というご意向かと受けとめまして、スタートラインがそこであるなら、それはスタートラインをつくらねばならないでありましょうということ、今職員が後ろで聞いてぎょっとしているかと思うのですが、挨拶のかわりに皆さま方とその意志を共有させて頂いて、またこれからの引き続きこの事業は末長く取り組んでいかなければなりませんので、色々な形でお力を頂ければと思っております。

本当にありがとうございました。

○宮原委員長

ありがとうございました。奥山市長、どうもありがとうございました。

今、大滝先生がお見えになりました。お席にお着きになったばかりで大変申し訳ないのですが、先ほど無事に市長に報告書を提出しましたことを、まずお伝えさせて頂きます。ありがとうございました。今まで委員さんの方から、少し今回の委員会での感想と、今後仙台市さんに対してどのようなことをこのメモリアルに期待されていくかという事で、3分位コメントを頂いております。もし、先生もお着きになったばかりで申し訳ないのですが、そちらのことで一言コメントを頂ければ大変有り難いと思います。大

滝先生には、本当に仙台市の総合計画、震災の復興計画からここにつながるまで、ずっとこちらの計画策定に関わってらっしゃってありがとうございました。是非、一言お伝えいただければと思います。よろしく申し上げます。

○大滝委員

すみません、遅れてきて申し訳ありません。たまたま、会議が重なってしまったものからです。

この会議を2年余りだったかと思いますが、特に最初の1年位の間はなかなか出席することが出来なくて、大変申し訳なく思っております。欠席がちで、断片的にしか出てくることができなかつたので、この会議をどこまで貢献できたかどうか、とても不安というか、あまりきちんと貢献できなかったのではないかなと思っております。

ただ、全体として提言した報告書を読ませて頂いて、復興メモリアルに関する非常に広範な分野の色んな柱がきちんと立てられていて、この後どういうような形でこれを進めていくのかということについては、大きな指針というか流れが出来たのかなと思えます。全く微力でしたけれども、それについて何らかの貢献ができたことは、私としてはよかったなと思っております。

それから、特にこれを具体的に前へ進めていくという事になるかと思いますが、2回位前の検討委員会の中で、ちょっと話題になったと思いますが、とにかく活動がすごく広範に渡っていて、全体的に統一して行うのか、いろんな仙台市の中の関係部局の中で責任を持ってこれを進めていращやるのかということについては、多分いろんなこれからのお考えのもとに進められるのではないかと思いますが、できればある種のつながりとか、統一性とか、それからそれが出来る限り直接当事者として関わってらっしゃる方だけではなくて、市民の皆さん達にも伝わってくるというか、見えるというか、何かそういう努力は是非して頂けるといいかなと思っております。先程、申し上げたように、非常に幅広い領域をカバーしていますし、それから復興メモリアルという言葉を使っていますが、お互いに関連はしているけれども大分様子も違うし、一見するとかなり離れているようなそういう分野もあるかと思いますが、一つの大きな流れとして仙台市としてこれに取り組みされていくことを是非進めて頂けるといいかなと思っております。

それから、そもそもこの委員会を始める時にも、話題になっていたかと思いますが、実際に被災された方も含めて、市民の皆さんがこれをどう受け止めるかというのは最大の課題だと思っております。委員の皆さんからもご発言があったように、この委員会自体には直接そういった方々が参加していないということがありますから、そこについてもそれはそれで非常に重要なことだと思っておりますので重く受け止めて頂いて、それとの間の整合性とか、どんなふうな形で市民の皆さんのご意見とか、お考えを上手く整合性を持ってやっていくのかというのを、是非意を払って頂ければと思います。

以上です。ありがとうございました。

○宮原委員長

どうもありがとうございました。お陰様で委員の皆さん、それから市長さんもお意見を頂きましたので、それでは進行を事務局の方にお返ししたいと思います。よろしく申し上げます。

○事務局（鈴木局長）

では、最後に私からで恐縮でございます。事務局を預らせて頂きまして、2年間本当にありがとうございました。この間、さまざまご議論をして頂きまして我々も色んな

事に気づかせて頂き、正直悩み、相当考えたりもいたしました。この2年間の事をこれからのメモリアル事業に大変深く、幅広い取り組みを進めていくうえでの力にしていきたいなと思っているところでございます。先程、市長も申し上げておりましたけれども、まさにスタートをこれから切るということでございますので、是非とも委員の皆様方におかれましては10回の叱咤の後に、1回の優しいご助言を頂きながら、また時には様々なプロジェクトに参画して頂きながら、今後とも是非ともサポートをお願いしたいと思います。本当にどうも2年間ありがとうございました。

○事務局（横野室長）

以上をもちまして委員会を終了したいと思います。ありがとうございました。

○市長

どうも長時間本当にありがとうございました。